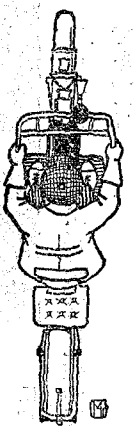
通信

渡歐通信

神奈川縣技師　桝井照藏



本通信は横濱出帆以後マルセーユ上陸迄の航海中に感じたる事、或は寄港地に於て僅かの碇泊時間を利用し上陸視察せる事柄を筆に任せて書き下せるものであるから極めて疎漏、淺薄なものである事を御承知の上御覽を願ひ度い。

日本を離れる迄

昭和二年六月廿日、愈々出發の日は來た、自分の乘込んだ一萬九百餘噸の郵船伏見丸は豫定の通り午前十一時靜かに九號岸壁を離れた、顧る埠頭には炎天にも關らず官民多數の方々が態々來られて何時迄も々々々も見送つて頂いた事は誠に感謝に堪へないと同時に是等の御厚意に對しても是非とも無事視察の目的を遂げ何等かの得る所有つて歸らねば申譯が無いとの決心を更に固くさせられた。

船から見る横濱は一層平常より懐しく復興の意氣は工事中の建築物より明かに認められた、來年の今頃歸朝の時には定めし見違へる樣になつて居るだらう、又左樣あり度い

ものだなど考へて居る内に船は遠慮なく進んで晝食の鉦の鳴る頃には早くも三崎の城ケ島沖を通つて居た。

一體時間の經濟から云へば神戸か門司迄汽車で行つて其處で乘船すべきであらうけれども自分は出發前多くの餘日を持たず役所の方の片附仕事に追はれて充分出發の準備を調へる事が出來なかつたので一應乘船して調べて見た上若し不足な品等があれば神戸で揃へらるゝ便利があるので殊更横濱から出帆した譯である。

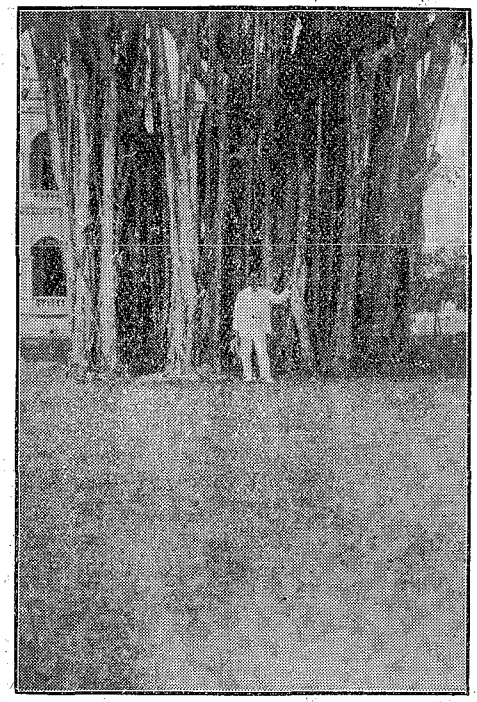
さすがに初日の事とて思ひはそれからそれへと飛んで床に入つても一向寢られなかつた。夜明け前熊野灘に差し掛つた時は多少船の動搖を感じたが大した事も無く船は豫定より稍々遲れて午後二時神戸に入港した。

數年間見ない内に神戸港は實に立派になつて居た特に目に付いたのは岸壁に近く聳へ立つ倉庫であつた。

神戸では中一日あるので京都迄足を延ばして伏見の桃山御陵へ參拜した、一人旅の自分に取つては必ずや明治大帝の御加護あるものと信じ非常に心強さを增した。

神戸でも舊知の村瀨技師其他多くの人々及び大阪から態々出掛けた奥村事務官等により送別の宴に招かれ又出帆に際しては田邊土木部長青木博士等に見送つて頂いた事は甚だ恐縮であつた。

門司に着いたのは早朝であつたが名物の石炭積込人夫は



シンガポールの榕樹に立てる桝井氏

已に待ち受けて居つて船が着くや否や直ちに蝟集し來り極めて巧妙迅速に恰もベルトコンベイヤーの如く作業するのであつた、後に見た何れの港にも之程上手に敏捷にやる所は無かつたが之果して誇るべき事であらうか、門司港の修築が一日も速かに完成して諸外國に劣らぬ機械設備によりもつと迅速にもつと廉價に積込み得るに至らむ事を希望する次第である。

六月二十五日午後一時に愈々船は日本の土地を離れた之で當時の別れだと思へば多少感慨に打たれぬでも無かつたら餘り急で無い。

六月二十七日拂曉目覺むれば船は將に吳淞を過ぎんとして居た、兩岸は見渡す限り青々たる平原で點々と茂れるは楊なるべく其間を支那固有の圓錐形の笠を冠れる土人の牛追ふ樣は眞に南畫を見る樣な氣がして何とも云へぬ良い景色であつた。

此黃浦江の幅は千呎乃至千八百呎であつて上海は此左岸延長八哩に沿ふた町で對岸は浦東と云ひ事實上海の一部をなして居る。

此兩岸は支那及各國によりて遺憾なく利用せられ深い所には岸壁を作りて數萬噸の巨船を横附し淺い所には浮棧橋を設けて艀荷役に便して居る。日本も日本郵船、大阪商船、三井物産等が相當の長さを占用し設備を施して居るのは心强く感じた試に各國占用の長さを主要なものに就き擧ぐれば次の通りである。

アメリカ	五三二〇呎
英國	二七四九〇

上海

上海と云へば地理に疎い自分は之迄楊子江の海に注ぐ所にあるものとのみ思つて居たが之は全く誤りで楊子江を泝る事四十浬にして吳淞に達し更に此處より右岸支流黃浦江を泝る事十四哩にして始めて上海に達するのである、何れも濁流滔々たる事は想像の通りで丁度日本の洪水の時の川を泝ると思へば大差無い但し流れは勿論平地の川であるか

支那	二四二六〇
佛蘭西	三〇七〇
日本	二〇七七五

丁度支那動亂の際である爲め上海には日、英、米、佛、伊等各國の軍艦が警備の爲め入港して居り英國からは更に航空母艦を派遣して、毎日上海の空に飛行機を飛ばして威嚇して居る。

上海の町は各國管理の共同租界、佛租界及支那町よりなつて居り繁華な場所は大部分共同租界にある。

上陸早々第一番に氣の付いた事は道路の立派な事と乘物の種類の多い事である。

動亂の爲め餘り深入りすると危險だとの事で支那人町所謂城内の方は視察するを得なかつた

上海の交通巡査

爲め不明であるが之は非常に道路も狹く且つ惡いそうであるけれ共租界内の道路は維持も完全に行はれ實に見事なものである。

現在共同租界内の道路の延長は百五十哩で其内百十七哩は完全に鋪裝せられ二十五哩はタールの簡易鋪裝で殘つて居るのは狹い横町で之は支那式の石塊鋪裝が施してある。

鋪裝の大部分はシートアスファルトで一部分南京路と稱する東京の銀座に比較して、更に賑かな通りには木塊鋪裝を施して居るが、何れも立派な路面を示して居り殊に木塊の如きは磨滅して居る所から見れば、相當の年月を經たものと思はれるけれども凹凸更に無く、足ざわり良く誠に結構な道路である。

斯く道路の狀態の良いのは一は維持に力を盡して居る爲めでもあらうけれども非常に重いローラーを用ひ充分に輾壓せる事、丁度一箇所工事中の處があつたので一寸車を止めて見たが此時のローラーは四十五噸のもので大抵是位のものを使用して居るそうである。又天候が大陸的であつて濕氣の少ない事等が主要な原因ではないかと思ふ。

兎に角全體を通じて道路の立派な事は想像以上で東京、横濱の道路を顧みて非常に恥かしく思つた、之迄見て來た人から度々話には聞いて居たけれ共、實際見なければ到底駄目であるとつくづく思つた、餘り大した費用を要する譯では無いから、東京横濱の市會議員の人々等は上海丈けでも良いからどし〳〵視察に來れたら大に得る所があるだらうと思ふ。市中は動亂未だ全く收まらざる爲め各國の陸戰隊が上陸して、要所々々に歩哨を置いて警戒して居り租界の周圍は何哩となく全部鐵條網を張り所によつては砂囊を積んで掩堡を造れる等餘りに仰々しく見えるけれども異鄕にある居留民としては無理からぬ事である。

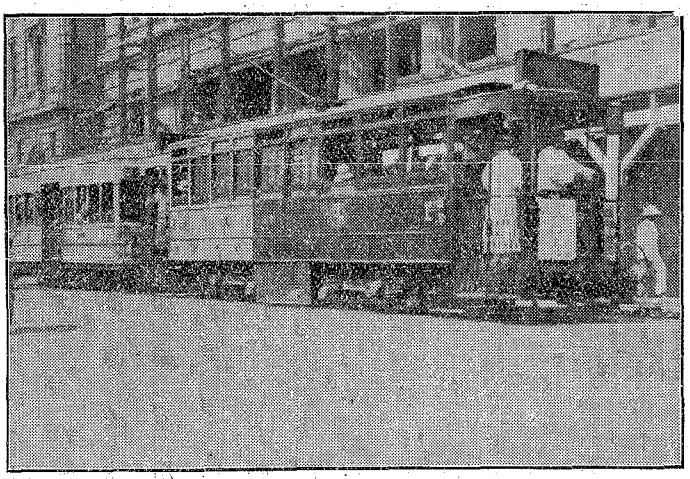
今では全く鎭靜に歸し追々守備兵も撤退するそうであるが、それでも市内には未だ所々に日本軍の山東出兵撤退を要求せるビラを張つて居る所があつたが、面白い事には之等は餘り日本と取引關係のない商人の店頭等で、日貨排斥の如きも之を利用して私腹を肥す一部の人間に依り殆ど年中行事の如く行はれ、却つて今では慢性となり更に效力が無い樣になつた相である、上海としては兎に角日本とは離れる事の出來ぬ關係にあるのは非常に日本の强味である。

乘物の多い事にも驚かされた無軌條電車、軌道電車、自動車、馬車、人力車等眞に織るが如く往來して居り、之が交通整理には印度人或は支那人の巡査が只一人、手に三尺許りの黑白段々に塗つた小さな棒を以て呑氣に悠々とやつて居るが、それでも立派に整理が出來て居る、東京や横濱で時々見る交通巡査の大仰に手を振り體を振り恰かもダンスをして居る樣なのは、之から見ると誠に御苦勞千萬である。

電車は主要幹線には軌道を布設して居るが、大部分は無軌條電車を走らして居る、鋪裝道路には無軌條電車は至極

適當である、如何なれば車輪は丁度乘合自動車のそれの如く幅廣きゴムタイヤーとし、然も一局部に偏して走る事が無いから路面を毀す事なく、又軌道を布設すればどうしても路面の一部を專用した形になり殊に軌道の破損した場合には、他の車輛に對し非常な障害を與へるから東京横濱に於てもどうしても路面に電車を走らせねばならぬものとすれば、無軌條電車は採用する價値があると思ふ。

又軌道電車にしても一寸調べた所によると上海では復線軌道の幅以外兩側二呎以上の全幅の基礎を一面の鐵筋コンクリートとして居るから、東京横濱で見る如き道路と軌道の境目に起るトラブルは更に無い相である。



上海の電車

乘合自動車も日本のものより遙かに大きなものを走らして居るが、一寸可笑しく感じたのは乘合自動車の横腹に大きく汽車と書いて居る事である、理窟から云へばとうか知らぬが吾々には一寸受取れぬ樣に思ふ。

夕刻歸船し食後甲板にて涼を納れ上海の燈火を眺めつゝ船長大矢氏と語つた。

大矢船長は極めて謹嚴な人であつて、其話も中々味のある者が多いから其内主な點だけを書いて見よう、

日本も追々道路の改良せられる事は誠に結構である、港灣としても之は喜ぶべき事で將來の港灣は能ふ限り大船巨船を横附けし得べき岸壁と直接之に結び付けたる完全なる道路により荷物は直ちに自

動車により八方に送られる樣にしたいものである、之に付けても京濱運河の完成は一日も速かならん事を望む次第で、彼の京濱間の廣大なる工場地帶に面して多くの船を入れ得る事とならば丁度此上海の如く繁榮は期して待たるゝのである。

今一つ最近疑問として居るのは彼の横濱の山下町地先の埋立地である、聞く所によれば之は公園とせらるゝ由であるが斯くの如く港に面したる重要なる場所を公園とするは如何なものであらうか、公園としては他に適當な所が幾何でもあるのだから斯かる場所には岸壁及倉庫を設け港として利用すべきではなからうか。

話は中々盡きぬが、餘り遲くなるので、切り上げて寢に就いた。

香港

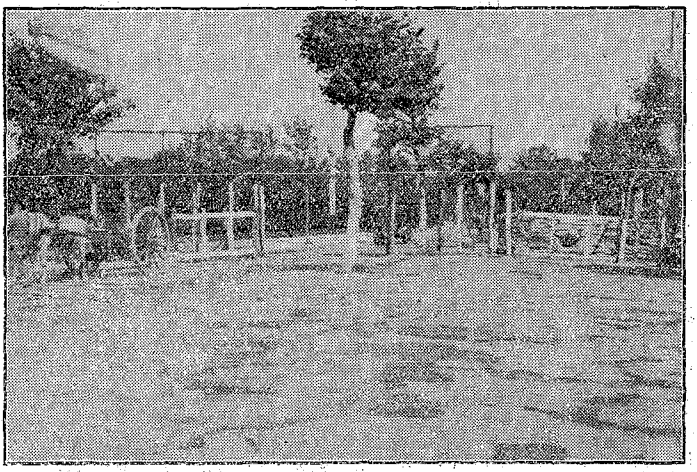
七月一日朝香港に着いた、之迄の航海は誠に穩かで玄海灘の如きすら油を流した如くで、何だか張合が無い樣だが未だ先には印度洋があつて、丁度モンスーンの時期だから樂しみだ。

香港の港といふのは支那廣東省の九龍半島と此尖端にある香港島との間の海峽であつて香港市街は島の方にある、港は全く廣東の玄關で輸出入貨物は此處では大部分中繼ぎするのみで、一部分は更に船で一部は汽車で廣東に送るものだから港灣としての設備は未だ完成して居らず、只だ九龍側に多少荷揚場がある計りで大體天然の地形を利用して居るに過ぎないが、英國政府は之が改良の意見を持ち已に調査もして居るから早晩實現するであらう。

香港で先づ目に付いたのは矢張り道路の立派なのと建築の堂々たる事であつた、元來香港島は面積約二十九平方哩周圍二十七哩の花崗岩よりなる勾配急峻なる一小島嶼であるから、地形としては市街に最も不適當であるが之に多大の人工を加へ海岸は埋立に依り出來る丈けの平地を造りて商業地區とし、山頂より麓に至る間は勾配頗る急なるにも拘らず巧みに之を切り均して住宅を建築し、其間を迂回し

て勾配緩なる自動車を走らせ得る道路を四通八達せしめ、然も全部をシート、アスファルト或はアスファルト、コンクリートで鋪裝して居るのだから大したものだ、英國政府は一朝有事の際は自由に至る所に砲車を曳き上ぐる爲め、斯くの如く山を繞れる餘り重要でない道路までも鋪裝したのだとの噂も永年此土地に居る人から聞いた、又此人の話に依ると餘り道路を鋪裝した爲めに、市民は土の道路が戀しくなり更に山の四合目邊りを横斷して土の散歩道を造つたそうである、此道路は大當りで夕刻などは手を携へてカツプルの散歩するものが多いので獨身者は歩けないそうである。

此外香港には例の有名なケーブルカーがあつて市の中央より背後に聳ゆる高さ千八百尺のビクトリヤ、ピークの頂上迄往復して居る、山の上と下町とでは溫度の差が十度近くもするそうで諸官署、會社等に勤める人は大部分山上に住宅を有し、以上の交通機關或は支那人の擔ぐ當地特有の轎で通勤し一日の勤めを終れば暑い町から涼しい自宅に歸るのだそうである之では定めし能率も上る事だらう。



上海租界の鐵條網と砂囊の掩堡

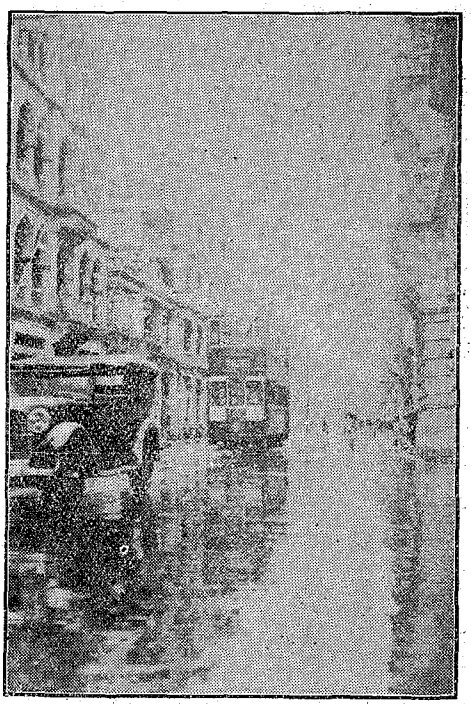
建築も中々立派で揃つて居る恐らく東洋では第一であらう、又市中には二階電車が走つて居るのは珍らしいが、餘り具合の良さそうなものでもなく體裁から云つてもどうかと思ふ。自分も餘り時間がないので自動車で一巡島を廻つて見たが、景色の良い所が多く殊に全島に日本の赤松が繁茂して丁度日本の

島を旅行して居る樣な氣がする、尋ねて見たら之は日本から移植したものだそうであるが此外英國政府の樹木を大切にする事は非常なもので個人の庭木でも之を移植したり切つたりするには一々屆け出でゝ政廳の許可を經ねばならぬそうである。

兎に角英國の香港都市計畫に對する努力は大した物で、元來香港は健康地でなく殊に六月頃は陰鬱で降雨多く現に自分の入港した時が雲は絕えず去來して山頂の眺望は駄目であつた位に、然も市民の大部分は衞生思想に乏しい支那人と來て居るから以前は隨分風土病、流行病等に惱まされたそうであるが近來では上、下水道の完備、衞生組合の活動等により全くの健康地と化したのである。

水道は是非視察したかつたけれ共、時間が無いので目的を達せなかつたのは實に遺憾である、說明によれば全島八ケ所に溪流を貯溜し之を濾過配水するのだそうで、雨量多き爲め貯水する事容易で二ヶ月も降雨無きに至り始めて給水を制限する位の由である。

香港の夜景は有名なものであるが、成る程船から見れば實に奇麗で山頂から海岸へかけて數萬の燈火が煌き水に映じた所は到底筆舌の良く盡す能はざるものである。



ホンコンの二階電車

新嘉坡

新嘉坡迄の航海も至極平穩に七月七日の夜遲く着いたの

であるが、岸壁に先着の船があつて餘地なき爲め港外に碇泊して一夜を明かした。此處は熱帶にて然かも赤道に近いのだけれ共、氣候非常に良く日中屋外では相當熱いが、屋內にては始終風があつて年中八十度內外の溫度で單衣一枚にて袷も綿入もいらぬ至極結構な處で特に朝夕の涼しく爽快なこと此上無いが、永年此土地に居る人に云はせると矢張り厭なそうである、樹木は年中青々として居り草花は絕えず咲き、御正月も御盆も浴衣がけと云ふ有樣で、更に變化が無いからだそうであるされば花咲き、秋來れば紅葉する處に生活の妙味があると云つて春來つて、頻りに日本を戀しがつて居た、無理も無い事と思はれる。

新嘉坡は馬來半島の南端にある島であつて、矢張り英領であるが英國は主として海軍根據地として軍港經營には力瘤を入れて居るが、商港の方は之に比し稍閑却して居る樣見られたが、それでも立派なもので大體自然の地形を利用し海岸線に沿ひ長き岸壁を造り中央に一ヶ所船溜りを設け、之等の岸壁の總延長は約四キロメートルで上屋の設備もあり又將來擴張の餘地も充分ある樣である。

早朝船外が喧噪を極めて居るので何事ならむと起き出て見ると、數艘の獨木舟に乘つた土人が船客の海中に投ずる錢を潛りて拾ふのであつた、だん〳〵船客は甲板に集まり來り面白さに次から次へと投ずるのであつたが、土人の中に一人八、九歲と見ゆる小兒を伴ひ來り客の同情を求めて居るのがあつた、丁度東京の乞食のやる手で人種は異つても同じ樣な事を考へるものだと面白く思つた。

新嘉坡はゴムの主要輸出港で市の內外もゴムと椰子の林許りである。

此處の町はさほど建築物には立派なものは無いが、道路は相變らず實に立派で郊外の方迄自動車でドライブして見たが、何處迄行つても皆アスファルトで鋪裝して居る、又熱いせいでもあらうが此處の道路は皆並木を植へて居る、それが皆熱帶植物であるから非常に目に付いた。

今一つ氣持の良い事は住宅地域では屋敷を非常に廣く取つて居る事である、中には餘り立派なので公園かと運轉手

に聞けば個人の邸宅であると說明せられて驚いた位で、森の都極樂とも思はれる程である。

自動車の數も非常に多く電車は無軌條である、之等の運轉手は皆馬來人及印度人であるが操縱は巧みである。

馬來人種は其の容貌が日本人そつくりで又言葉の調子も似て居り、中には日本語と同じ言葉があるそうで日本人の祖先だと云ふ說のあるのも無理からん事と思はれた。

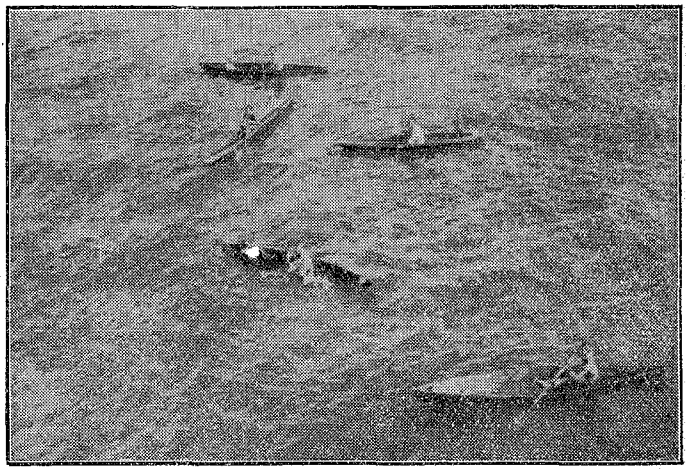
此處の博物館は中々良く集めて居る特に熱帶動物の標本の數多きと見事なのは他に其の例を見ない。

彼南

ペナンも矢張り英領で市街はペナン島の東北隅にある馬來半島との間の海峽を碇泊所とする天然の良港である、香港、新嘉坡、彼南何れも其の軌を一にし市街は總て島の側に造つて居る、之等も英國は軍事上其他の點を考慮して定めたのであらう。

港灣設備としては、大したものなく簡單なる上陸棧橋がある位のものである。

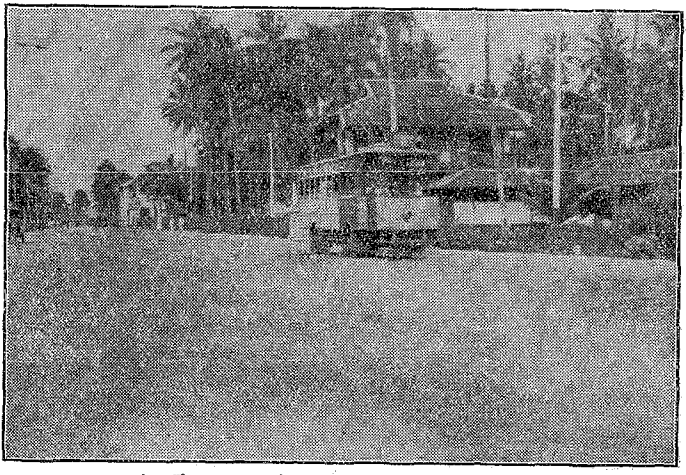
馬來半島には山が少ないが、ペナン島は山多く市街の直後には二千五百尺許りのペナン、ヒルがある、香港を眞似てケーブルカーで頂上に登る樣になつて居るが、町が小さい丈けに餘り乘客は無い、從つて料金も高く片道一弗宛を取られたのには一寸驚いた、カーは途中で乘り換へ二段で頂上へ達する樣になつて居る、頂上には茶店があつて



シンガポールー土人の海中錢拾ひ

此處から眺めた景色は海峽を隔てゝ半島あり丁度瀬戸内海の高松附近の景色に似通つて、中々良く又二千尺以上も登つて居る事として非常に涼しく寒い位である、又此附近の椰子の植林は見事でケーブルカーの中途より俯觀すれば見渡す限り何十町歩となく規則正しく植へ附けられた椰木の林は何とも云へぬ雄大な眺めである。

ペナンには此外別に見るべきもの無く、只だ強て名所として居る支那人の蛇寺、極樂寺がある、見る必要もないと思つたが之に行くには數哩のドライブをするので道路を見るのを樂しみに船客の一行に加はつた、此處も道路は實に良く市内は勿論遠き郊外の道路も總て鋪裝して居る、郊外は別に基礎を造ることなく、地盤を輾壓し其上にアスファルト、コンクリートを置いたのみであるが、トラフィック比較的少なき爲め立派な路面であつた。



シンガポールの無軌道電車

此ドライブに傭つた自動車は午後五時迄と云ふ時間で極めた爲め、運轉手はスピードを落し、幾何催促しても返事許りで強て時間を延長させる土人の圖々しさには腹が立つた。

蛇寺とは生きた蛇を佛壇の所々に置いて居るもの、極樂寺とは地形の良き山腹に築いた寺で何れも支那人の經營で參詣者には署名させ、次は寄附金を請求する邊は流石に支那人であると思つた。極樂寺で東鄉、乃木大將の連ねて署名されたものを額にして居たのは珍らしかつた。

彼南出港以來船上は非常に賑かとなつた、それは馬來半島方面へ出稼ぎに來て相當貯蓄の出來た印度人の百名餘りの一隊が歸國する爲めデッキ、パッセンジャーとなつて乘り込んだ爲めである、出帆近くなるや彼等はそれ〴〵手荷物を持ち、先を爭つてデッキ上の好位置を占領せんとし、喧々囂々たる所を電光にて照らした模樣は丁度關東大震災の時の避難場の如く漫ろに當時を思ひ出させられた。

彼等の中には醫者もあればホテルのクラークもあり、相當の人物が混つて居るのだそうだが、何れも甲板上に自炊して起臥し安價に海を越へて故郷に錦を飾るのであつた、御蔭で彼等の飯を攫んで食ふ樣など、生活の一斑を窺ひ知る事が出來たのは幸であつた。

愈々之から四日間は印度洋を横斷するので、定めし荒れるだらうと思つたが案外にも穩かで只だ時々名物のスコールに逢つたのみであつた。

コロンボ港は波の荒きを以て有名であつて天然の地形よりは人工で出來た港で英國政府は之に二億弗以上の經費を投じたと云はれ然も其大部分は防波堤に費されたのである

自分の入港當日は極めて穩かだと云ふ事であつたが、それでも港外より打ち寄する波は防波堤を越へて高く重吹を飛ばして居た、此防波堤の港口は完成後船の入港に危險なので、更に外方に岐れて突堤を出した處などは、良い參考である。

船客の多數は、コロンボより數十哩奥地の釋迦の齒を祭つてあると云ふキャンデー町へドライブするのであつたが、話に聞けば箱根のドライブに劣りそうなので、自分は止めて一應港内を視察した後、コロンボ市の内外をドライブして見た。

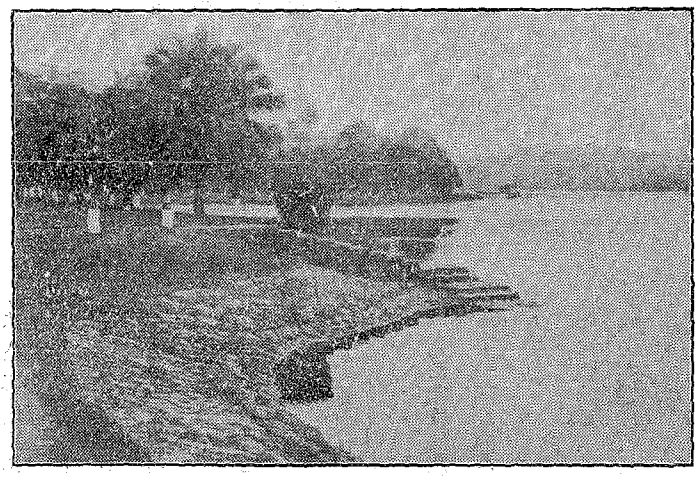
コロンボは錫蘭島隨一の貿易港たるのみならず、近來歐洲人の遊覽旅行に來る者が多いので、町は中々賑かで立派な商店も多く町の内外共に道路の良い事も他に劣らない。

市外の海岸は實に景色良く、椰子樹の茂る白砂の濱に波

碎ける風情は一寸他では見られない。此海岸の最も好位置にラビニア、ガルフエース等の堂々たるホテルがあつて客を呼んで居る自分も一寸ラビニアに立ち寄つて茶を飲んだが、丁度江ノ島から鵠沼海岸を見る樣な具合であつた。

歸路博物館に寄つて見たが、此處には印度古代の彫刻物で立派なものが目に付いた、庭に餘り立派な榕樹（タコの木）があつたので其の前に立つて紀念の寫眞を撮した。

之迄の航海は誠に穩かで丁度今は印度洋名物のモンスーンの時期であり乍ら、之では餘り張合が無く話の種にならぬから一度は遭遇して見たいものだと思つて居たが此願ひはコロンボを出でゝ遺憾無く充たされた



シンガポールの水道貯水池

七月十四日の夕刻コロンボを出帆した、防波堤外に出るとウネリがあつて多少船はピッチングをやるので、遠に印度洋であると感じさせられたが進むに從つて風は次第に其勢を增し、十五日夕刻からは全く暴風となりマストに當る風は唸りを生じ、山の如き巨浪は相次で襲來し一萬餘噸の我伏見丸も上下、左右に動搖してブリッヂに立つて見て居ると、船首は時々浪の中に突込み甲板を洗つた海水は瀧の如く流れ去り歩くのに欄干其他に摑まらねばならないのであつた。之が四日も五日も續ひたのであるから船客には大分弱り込んだ人があつた、自分は元來船には餘り弱くない方であるが、それでも三日目あたりからは何だか頭が少し變になつた。

七月廿日アフリカの最東端にあるソコトラ島を左に見てアデン灣に入つて漸く波穩かになつたが船は之が爲め一日遲れて廿二日早朝アデンに入港した。

アデン

アデンはアラビア大陸の最南端の噴火に依りて出來た半島の舊噴火口内にある町であつて、アデン港は之より西に二哩計り離れ、地形の稍々灣形した所を利用したもので大した港ではない。

廿二日の朝起き出て見ると一面に霞んで、更に陸地が見へないので船長に尋ねると之はアラビア砂漠からの土煙りで最早アデン港に近いのであるが、見へないので今停船してラヂオの方向探知機で調べて居る所だとの事であつた。

漸々にして入港したが、船から見るアデンは實に滿目荒涼たるもので見渡す限り山も平地も樹木は勿論一本の草もない赤褐色或は黑色の熔岩で、海岸の小高い所には英國の要塞で陽に大砲を据付けて居るのは一層暑苦しく感じた。

四時間計り碇泊するので一寸上陸して、アデンの町迄二時間程ドライブして見た、町の家は總てアラビア風の建築で低く屋根は水平にして雨水を採る樣にして居る、此處は雨の少ない所で年に一度降るか降らぬかであるから、水は非常に貴重なので唯一の水源はアデンの町の後方にある噴火口の一部に堰堤を築き、之に雨水を貯溜し是れを簡單な手働ポンプで汲み上げ、別に濾過する事もなく駱駝の曳く車の上に取付けたタンクに入れ、市中に運び分配するのでアデンの町は此外奥地より物產を運び出す駱駝とで其の往來眞に絡繹して居る。

此水源地がアデン唯一の見物場所で、土人はタンクと呼んで居る。

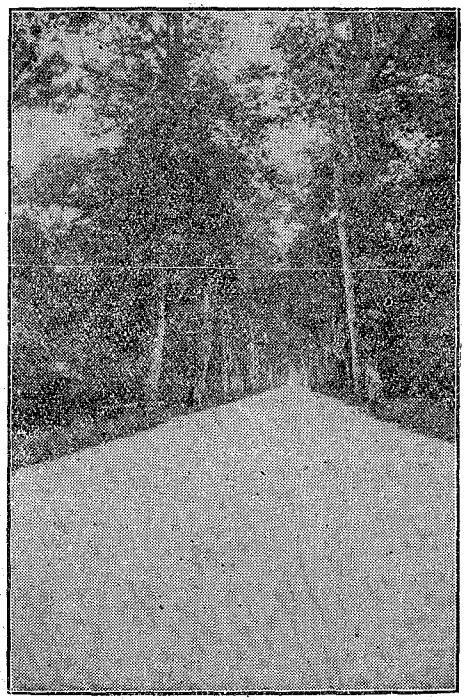
道路も餘り立派でなく市中は貧弱なアスファルト、コンクリートを使用して居るが市外はマカダムで砂漠の土煙と混じ自動車が通れば砂塵の朦々たる事日本の道路より更に甚だしく殊にアデン港と町の間にある幅狹き隧道内の如きは、此上に駱駝の小便の臭氣甚だしく不愉快千萬であつた。

夕方船の出帆する頃になつて砂煙は益々甚だしく船中至る所、眞白に積るので船室を開けて置く事出來ず暑さは暑し實に閉口した。

カイロ

アデンを出で紅海に入つてからは暑さ一層甚だしく、風があつても熱いのが吹いて來るので却つて氣持惡しく、然も時々土煙の襲來で惱まさるゝ事夥しかつた。

紅海は萬國地圖では細長いので絶へず兩岸が見へるものとのみ思つて居たが、實際は中々そうで無く時々島は見へても大部分は大洋と同じく空と海許りである、然し最奥のスエズ灣になつてからは急に狹くなつて兩岸が良く見へ、何れも不毛の地ではあるが數百尺の斷崖に整然たる地層が見へたり、緩かに波打つた砂漠があつたりするのは又異つた趣があつて中々良い景色である、殊に夕日に照り映へた山々の色は何とも云へぬ美しさであつた。



シンガポール郊外並木道

スエズには丁度夕方暗くなつてから着いた、スエズの運河は兼てから之を通るのを樂しみにして居たのだが、都合惡しく夜中に之を通る事となつたので到底其の模樣も分らぬであらうし、大體の事は已にレポートでも見て居るので誘はるゝ儘に此時間を利用して陸行しカイロ市を見物する事にした。

スエズで埃及入りの許可を得たりなどして上陸したのは午後九時頃であるから、最早カイロ行の汽車は無いので自

動車で行くのであるが一行は二十五名許りで中には九大の西川博士夫妻も加はられた。

スエズからカイロ迄の道路の延長は約九十哩で、全部アラビア砂漠を横斷して走るので數臺の自動車が連續して行くのではあるが、其間相當の距離があり周圍は全くの無人境で往來も更にない暗闇を土人の運轉手に托して走るのであるから何だが薄氣味が惡かつた。

道路は全部碎石道路ではあるが、幅も相當廣く狹き部分にても五間位はある然も全部直線と云つても良い位であるから自動車のドライブには好適で、然も夜更けて交通更に無く途中で何物にも出逢はなかつた位だから、運轉手は盛んに速力を出し時には五六十哩も飛ばすのであつた。

此長い道路も修繕は中々良く出來て居り、石灰石の碎石は至る所に貯へてあり又數ヶ所修繕中の處もあつたが、從業員は何れも其の附近に天幕生活をして居つて修繕箇所の前後には警戒燈を點じて居たのは感心した。

道路の修繕は誰がやつて居るかと運轉手に尋ねたらエジプトの政府さと、得々として答へた成る程埃及は獨立國であつたのだ。

カイロ市に着いたのは眞夜中であつたが軒を竝べた建築の美しき事、光つたアスファルト街路の良き事は夜目にも明かに見られた。

明日は午前十一時の汽車に乘らなければボート、セットで船に追付く事が出來ぬので、朝早く起きなければならぬから未だ街は賑かで見物したいのは山々だが直ちにホテルに入り床に就いた、一寸寢たかと思へば早くもボーイはノックして朝飯の用意が出來た事を告げるのであつた、時計を見れば五時半であつた。

時間が少いので食事もそこ〳〵に、直ちに自動車に乘り込んで美しい町をドライブしてナイルの河を渡つたが、此時の橋の形が變つて居つてスパンが非常に長いので尋ねて見たらスウイングブリッヂ（旋開橋）であつた、其の親柱は四本共高い臺の上に見事な獅々の鑄像を置いたもので非常に目についた。

暫くにして郊外を出で眞直な道をギザの金字塔を遙かに望みつゝ之に向つて走るのであつたが、路面はアスファルト、コンクリートで滑かなるもので、アカシヤの街路樹は兩側に茂り片側には電車も併行して走つて居るが、線路は全く道路の外側にあるので少しも道路の交通を妨ぐる事なく、道路の兩側は沃野千里で點々として棗椰子が群生せる間には綿其他のものが青々として居る樣、丁度日本の田園の如く爽快であつた。

金字塔の手前數町の處で强ひて自動車から下ろされ駱駝に乘せられたが、此馭者が途中絶へず足をつゝいては酒手をねだり又乞食の樣な土人が怪しげな土像を買つて呉れと附き纏ふのであつたが、兼てやつてはならぬと案内者に云はれて居るので知らぬ顏をして居ると、何時迄も根氣よくねだるので實に五月蠅く落付いて見る事も出來ぬ位で腹立しかつた。

埃及カイロのナイル橋の觀柱

金字塔やスフインクスは餘り豫想が大きかつたせいか話程では無いと思つた、只だ之が紀元前四千年のものであると云ふ一事は驚嘆に値する

此外急行でモスク（回教寺院）城塞、博物館等を見たが何れも壯麗なもので殊に城塞内にある埃及中興の英主モハメツト、アリの建てたモスクの如きは實に立派なものである、要するにカイロは建築家に取つては非常に參考になるものが多い樣に思はれた。午前十一時發の汽車に乘り込んでポート、セツドに向け出發した、所要時間は四時間

餘で其の半分はキイルの沃野を走り他の半分は砂漠の中を走るのであるが、此砂漠にかゝるや汽車の疾走は濛々たる砂塵を舞ひ上らせ之が車内に飛び込むのだから、たまつたものでなく頭から眞白に浴びて苦しい事甚だしかつた。

終りの三分ノ一はスエズの運河と併行して走るので、可成り長い間親しく運河の模樣を見る事が出來たが實際に見ると其の幅が非常に狹く又構造も簡單なのに驚いた、單に砂漠を掘り割り其の土砂を兩岸に堆積し波打際丈けを石積で保護して居るので良く崩れないものだと思つたが進むに連れ所々に崩壞して修繕して居るのを見た。

午後三時過ボート、セッドに着き船は六時出帆との事であるから、直ちにランチで乘り込んで見ると都合で午後十一時になつたと聞いて實に殘念に思つた、それなら今少し緩くり視察が出來たものを。

ボート、セッドの町は大したものではないが、港は運河の入口を次第に擴張し防波堤を築き對岸には工場も出來中々立派なものである。

カイロから此邊一帶は物價の非常に高いのには驚いた。殊に土人は外人と見ると懸値を云ふのでうつかり物を買ふ事も出來ない。船は豫定の如く午後十一時出帆して愈々地中海に入つたが、同時に非常に涼しくなつて三日目あたりは寒い程で今更に印度洋の苦しかつた事を思ひ出された。

海上至極穩かに三十一日伊太利のナポリに一寸寄港し八月二日愈々マルセーユに無事入港した。

自分はスエーデンを是非見たいと思ふので、それには同國は非常に寒いから少しも早く暖かい内に行く必要があるので南歐は後廻しにし何れナポリ、マルセーユ等は又來る積りであるから其時通信する積である。愈々之から本舞臺に掛かるのだと思ふと非常に緊張し、今更に責任の重きを感ずるのである。以上述べた所誠に皮相の觀察であつて誤れる點も多々あるべく、自分乍ら物足らず思はるゝけれども時間に制限があるので徹底する事が出來なかつたものと御認めの上御寛容あらむ事を願ふ次第である、次回からは多少實のある事を御報告したいと思つて居る。